

Title	大阪における商業・経済教育事始
Author(s)	宮本, 又次
Citation	大阪大学史紀要. 1 P.17-P.24
Issue Date	1981-05-01
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/12405
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

大阪における商業・経済教育事始

宮 本 又 次

一 商業教育の発端と大阪

わが国における高等専門商業教育は、明治七年四月大蔵省銀行課内の銀行学局にはじまるであろう。これは紙幣頭得能良介の設立したもので、英人シャンドを聘して簿記学・経済学を教授したものである。

ついで明治八年私立商法講習所が森有礼によつてはじめられる。これは東京市京橋区尾張町の煉瓦建家屋をかりて行なわれた。米人ウィットニーをして事にあたらしめた。当時すでに三田に慶応義塾があつて、授業の一部に経済学をおいていたが、なんとについても商法講習所が商業学校としては濫觴であつたらう。

森有礼が清国駐劄公使となるに及び、これを東京会議所に委託し、会頭渋沢栄一、副頭取西村勝三、議員益田孝が斡旋した。木挽町一丁目にうつり、市民の公有財産七分金をもつて維持費にあてていたが、保管の資金が府庁に引きつがれると、東京商法講習所も東京府立と

なる。

矢野二郎が商法講習所所長となる。ついで十七年三月に農商務省管の東京商業学校となる。そして同十八年五月、文部省移管、同九月東京高等商業学校となる。

商法講習所はもと鯛味噌屋の二階を借りてはじめたもので、「商法講習」は当時の通語に従つたものである。米人ウィットニーは、ブライヤント・ストラトンの帳合法、ウエキランド氏経済書、ブライヤント・ストラトン氏商用算術などを教えた。授業は英語によつたらしい。当時は、治国平天下を夢みて、大学予備門に青年はあつまり、商法講習所はいろいろと勧誘してやつと二十二、三人の生徒があつまったにすぎず、学業を完うしたものは十名を出していない。

矢野二郎（本名次郎兵衛）は久しく米国に在留して帰朝したものである。

神戸にも明治十一年一月に北長狭通四丁目四〇に商業講習所が設けられ、慶応義塾出身の甲斐織衛が支配人の名で所長となる。はじめ区

協議費を期待していたが、一部しか出ず、貿易五厘金で補充したという。のち明治十三年八月、箕浦勝人がその所長となる。神戸商業講習所は、明治十九年に神戸商業となり、のちに県商となる。これは、のちの官立神戸高商とは別である。

岩崎弥太郎は明治三年土佐藩大阪藩邸の最上席者となり、開成館大阪商会の商事をも所管していた。弥太郎は土佐藩のため外国人招聘・雇入れにあたり、また大阪藩邸（西長堀、堀江）に英語塾を開き、米国人教師ヘースを招聘し、若い藩士に英語を学ばせ、弟弥之助・豊川良平・川田龍吉（小一郎の長男）林包明（後の自由党幹事）・竹内明太郎（綱の長男）・近藤廉平がその塾生であった。

開成館大阪商会は、明治三年十月以降表向き藩営から離れ、九十九商会の名で汽船運輸を開業し、五年一月三川商会と改称した。その名称は代表者川田小一郎・石川七財・中川亀之助（森田普三）の三つの川を合せたものである。明治六年三月三川商会を三菱商会と改称したが、この頃もなお岩崎邸内の英学塾は存在していた。

徳島出身の近藤廉平が三菱商会に入会したのは明治五年のことであるが、まず東京の茅場町の支店におり、更に大阪長堀の浪華本社詰となる。岩崎邸内の英語塾に寄宿し、生徒一同を取締る役を命ぜられた。舎長（舎監）である。

この塾は実用英語を教える商業学校で、生徒には上記の如く豊川良平・川田龍吉・徳弘為章・吉村可成・竹内明太郎・林包明などがいて、教師は米人ドクトル・ヘースで、語学の教授と医業とをかねていた。近藤廉平はすでに大学南校や長久館で学んで、相当に英語の素養があ

ったので、ヘースは近藤を試験した上で、第七学期に編入、学力もあり、年長でもあったので、弥太郎はヘースと相談の上、舎長を命じたのであった。ここは新日本の実業を担当すべき一粒よりの学生を収容していたのである。この学生の監督をする近藤は、とくに岩崎弥太郎の囑目する所であった。しかし明治六年五月、近藤は社員の列に列し、袴を脱して前垂を着けることを命ぜられる。のち明治七年四月、三菱商会は本拠を大阪から東京に移し、土佐出身者の外、慶応義塾や東大の出身者を入れるが、専ら実業教育を目ざし、明治十一年三月に三菱商業学校を東京神田錦町二丁目に開設する。

森下岩楠が校長、馬場辰猪らが教員、生徒には山本達雄らがいた。豊川良平が校長となる。実業教育を旨としていたが、この前身は実は大阪時代にあつたといえる。三菱の商業学校は、開校と同時に一回八名の生徒を有し、その中に岩崎久弥・岩下清周らがいた。明治八年九月、森有礼と富田鉄之助が米人ウィットニーを招いて開いた商法講習所も、一時閉鎖されようとしたとき、岩崎弥太郎はこの三菱の商業学校にそれを合併しようとしたくらいである。しかし、この三菱商業学校も生徒が大隈・福沢の系列に属する論客であつたためと学校当局が独走したので、ついに十七年頃閉鎖するに至る。そして、その跡から英吉利法律学校と東京英語学校（杉浦重剛校長）の二つが生まれる。

大阪の造幣局では、五年四月に益田孝が造幣権頭に就任すると、有志とはかつて日進学舎を設け、理化学、数学、建築学を教えたが、のちV・E・ブラガを雇い入れて複式簿記を教えさせた。

大阪の造幣局が大阪文化、とりわけ文明開花にはたした役割は至大

であった。教育の方面では、局員に英語とか物理・化学を教える必要から、英語の塾として日進学舎を設けた。造幣局の局員だけではなく、造幣局以外の人々も希望すれば開放したもので、大阪の人で、ここで英語を学んだ人々が少なくない。

この日進学舎は、元造幣頭であった井上馨の企画による。五年四月に造幣権頭として益田孝が就任する。この益田の着任と同時に寮員の有志が発起して、理化学をはじめ数学とか機械・建築の学術研究のために設けられたもので、もとは寮内の子弟のためのものであった。経費は寮員の月給の幾分かを拠出したものであるが、次第に入学者も増し、遂に外国人教師一名を増員することとなり、益田孝権頭が下阪して来た井上造幣頭に請願して、本省から毎月五十円、寮内諸局不用品売却代金を補助金として下付されることになった。

御雇外国人の一人にポルトガル人と中国人の混血のV・E・ブラガという人物がいた。この人物は簿記指導のために雇い入れた人物である。複式簿記を最初に採用したのが、大阪では造幣局で、いまま当時の簿記書が造幣博物館にのこっている。

東京ではシャンドがやっていたが、大阪ではこのブラガが複式簿記を初めて教えた。このブラガは日進学舎の教師にもなり、洋学・英学を原書をつかって教えた。新聞紙を備えて、内外の事情にも通じさせ、職工のほか付近の子弟も収容した。

当時、日本人の造幣局の技術者もこれを応援した。久世治作はその代表者で、早くから舎密学を勉強し、造幣局では製煉の分析所長のよきな仕事をしていった。

また谷敬三という人物がいた。この人は、坪井誠軒(信道)の二男で、天保十二年生まれ。坪井信道は緒方洪庵の恩師である。この信道の子信友は大阪に来て、緒方洪庵の適塾と広瀬旭荘の門に学び、のち幕府の蕃書取調所に入る。のち信友は父の信道を襲名して萩に赴き、病院を管理したが、三十六歳の若さで病没してしまふ。

そこで八歳の幼童の信敬がのこるが、二十二歳のとき横浜にでて、英語を修め、ヘボン(平文先生)につく。そして、坪井信敬は谷家の養子となる。谷家は金座改役の家筋。そんなわけで谷信敬は、造幣局の出仕となり、谷敬三と改名する。この造幣局地金係(局長)の谷敬三のところへ、親戚の坪井九馬三が来て、居候になる。

坪井九馬三も蘭学者の坪井信道の縁者である。坪井九馬三は、ここで洋学の手ほどきをうけ、のち自然科学の道にはいるが、あとで歴史学を修めて、日本における西洋史学の開祖・泰斗となる。

大阪の公事師の宿として播磨屋というのがあった。この養子になったのが馬越恭平である。造幣権頭になった益田孝は、大阪へ来て播磨屋でとまり、その養子の恭平を知り、『西国立志伝』を与えて勉強をすすめる。恭平は、造幣局の日進学舎にはいつて英語をおさめ、のち益田に従って三井に入り、三井の大物になる。

また六年四月難波別院内に政学校が設けられ、翌五月集成学校となる。これに進学するもののため、七年八月、今橋五丁目に東進級学校を、靱南通四丁目に西進級学校を設け、同年十月東進級学校を難波別院内に移し、翌八年九月西進級学校を廃して、東進級学校に合併した。

明治十年六月中之島常安町に校舎を新築し、ここに集成・進級学校を合一して大阪府第一番中学校とした。この前に集成学校内に商法学予科が付設され、商業教育の端を開き、英語、商法、簿記法、経済学、銀行出納法を課程としていたが、集成学校が大阪府第一番中学校になるに及び、中絶した(宮本又次『大阪文化史論』三四八―三五〇頁、三五四―三五六頁)。

二 私立大阪商業講習所の設立

大阪では、十三年十一月に大阪商業講習所が設立される。大阪府在住の五代友厚外十数名が相謀って「方今我国文物大いに進歩し、普通教育の如きは措て云はず、法学・理学・文学・医学・天文・地理・兵法・航海・造船・機械・農工学其他各種専門の学校に至る迄特に大いに備わらんとするの時に方り、独り専門商業学校の全国観るべきもの甚稀なるは実に今日の一大欠点と謂はねばならぬ。況や当大阪の如きは戸数十万、人口三十万、所謂四通八達の要区にして天然既に我国実業中心に位し、貿易交通の旺盛なる全国中其右に出づるものなし、全国の商権を握り各地の商況を左右するを得たるも、近代事物の変遷に従ひて商業上に著しき変動を起し、自由営業の世となり、電信汽船の便は製産地需要地の間を密接ならしめ、大阪商人の手を借らざるに至らしめた。是等は皆文明進歩の美果にして喜ぶべきことであるが、徒らに旧慣を墨守し、世の風潮に應ずるの用意なくして、今日の小康に安んずるが如き状態にありては到底従前の繁栄を将来に維持すること

困難であろう。宜しく奮って商業上の改良進歩を図らねばならぬ。其改良進歩を計画するの要須く先づ商業講習所を設置し、商売の子弟をして普く商業上の教育を受けしめるにあり」と提唱した。

かくて各自の資産をさいて若干の金員を投じ、銳意これが創立につくし、西区立売堀北通三丁目十七番地を卜して商業講習所を設立したのであった。

先に設立された東京商法講習所の論旨に大阪でまっ先に共鳴したのが、豪商門田三郎兵衛と加藤政之助であった。

加藤政之助は慶応義塾に学び、当時大阪の二大新聞の一つであった「大坂新報」に編集主幹として迎えられた。すなわち「大坂新報」は平野万里を社長としていたが、肺患のため静養することとなり、五代友厚がそれを引きうけ、五代の弘成館の社員で代言人でもあった、本莊一行を社長とし、主幹として加藤政之助を招聘したのである。明治十二年八月加藤着任早々の十四、十五日の社説に「商法学校設けざるべからず」をかき、大阪のような商売の中心に商法学校なきは怪むべきことの一事なりと指摘し、その急務をとぎ、海外通商の舞台において商権を確立し、もって国富の増強に備へるべしと力説した。ときに加藤は二十六歳の青年であったが、同年輩の豪商門田三郎兵衛はこれに共鳴した。門田は十人材木屋の一人熊野屋三郎兵衛の五代目である。その四代目が病没すると分家の熊野屋理平店(熊平)から養子にはいったもので、熊三〇(くまさん)を商号としていた。

門田三郎兵衛は西長堀南通りに多くの材木浜を所有し、また「興民新誌」なる週刊誌を編集していた。加藤政之助の社説に共鳴し、「興

「民新誌」の編集をもやめて、学校創設の資金カンパにのりだす。それよりこうした自由な若い市民の識見が源流となって、大阪商業講習所の設立準備がすすむ。丁度北区の区長であった河口淳も実業振興に熱心であったので参画し、そこで大阪財界の最高実力者たる五代友厚（商法会議所初代会頭）を動かし、これが中心となって、住友家、鴻池家、藤田家の代表も参加し、十六名の創立員で「大阪商業講習所」が開設されることになる。

明治十三年十一月十五日の開校で、場所は立売堀の旧町会所のおかれていた民家の二階（西区立売堀北通三丁目十七番地）で、この建物は立売堀の材木問屋が中心になって作っていた「町会所」である。いまは明治小学校新校舎の南側、阿波座小公園の一部にあって、その一隅に記念碑が建てられている（『大阪市立大学の百年』一三八頁）。

私立商業講習所の学制は二本立てで、昼間本科の正科生徒と夜間に簿記算術を学ぶ速成科生徒に分け、当初は六十余人の生徒を収容した。簿記・経済・算術の三科を主要科目とし、貸与制の教科書には「宝氏経済書」（訳書）「大英商業史」「算学教授書」「電信機図解」などがあつた（『大阪市立大学の百年』一三八頁）。

私立大阪商業講習所創立員としては五代友厚が筆頭にあり、鴻池善右衛門、平瀬亀之助、広瀬宰平（住友吉左衛門友親代理、杉村正太郎、大三輪長兵衛、鍋釜鑄造会社、渋谷庄三郎、渋谷庄十郎、安田源三郎、金沢仁兵衛、田中市兵衛、広野九良右衛門、筑紫三次郎、河口淳、門田三郎兵衛、醬油会社が名をつらねている。その総代は府下西区西長堀北通二丁目七番地平民門田三郎兵衛、同府下西区土佐堀裏町三四番

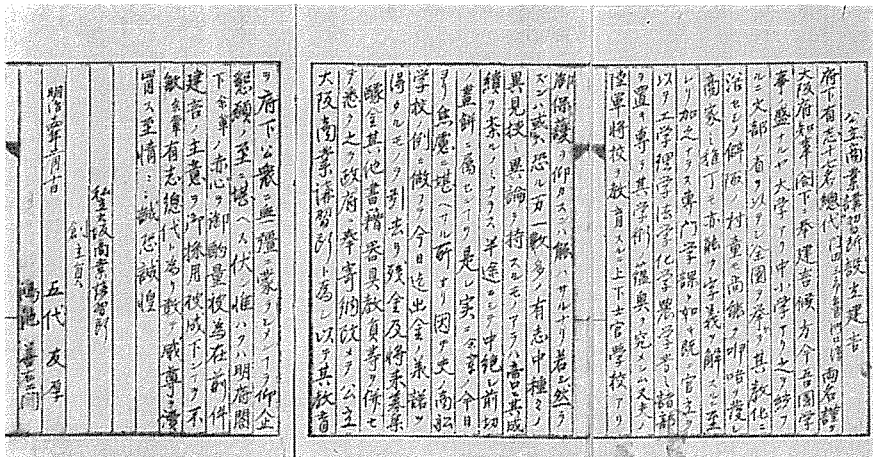
地士族河口淳であった。

当初は桐原捨三を所長とし、簿記・経済・算術及び商業実習を教え、夜学でも速成科をもって簿記・算術を教えた。桐原は加藤と同門の仲で福沢の推挙によって就任したものである。すなわち簿記・経済・算術の三科をもって正科とし、更にこれを銀行・会社・仲買・小売などに分ち、郵便・電信の実務をも授け、生徒をして実地商業取引に習熟させた。大阪の商家は大いにこれを歓迎した。しかし不況下にあつて、容易に寄付が集まらず、当初から経営は困難をきわめていた。もちろん商家は大いに歓迎し、百余名の生徒も集まったという。五代らは、これを府の所屬にする必要があるとして請願し、十四年二月十日「公立大阪商業講習所設立建言」を府知事建野郷三宛に出している（宮本文次『五代友厚伝』三九二頁）。

三 府立大阪商業講習所とそのあと

明治十四年三月七日知事建野郷三は西・北区長の河口淳あてに分立にする建言を説議するが、有志は寄納金を確定し、連署捺印の上、願出せよといっている（『五代友厚伝記資料』第四卷、一九八～一九九頁）。願出の府下有志十七名、創立委員長は五代友厚、創立委員は鴻池善右衛門ほか十五名。八月三日校舎を西区江戸堀南通三丁目旧府会議事堂跡二階に移し、公立にして大阪府立商業講習所と改称することにした。民間の寄付金のみでは足らず、官府の保護を仰がねばならぬとしたものである。なおこれまでの出金、書籍、器具、教員は府に寄納するもの

で、別に大阪にできていた商船学校の例にならうとしている。出金額
 ・寄付金は五代友厚が二〇〇円、門田三郎兵衛、熊野屋、材木屋が二〇
 〇円と、別に創立費として三〇〇円を寄付している。住友吉左衛門総
 代理人広瀬幸平は年五〇円、伊庭貞剛も三カ年限年五〇円を出してい



公立商業講習所設立建書書(署名者は、総代門田三郎兵衛、河口淳ほか17名)

る。その他大三輪長
 兵衛、杉村正太郎、
 平瀬亀之助、鴻池善
 右衛門、渋谷庄三郎、
 渋谷庄十郎、中野梧
 一、藤田伝三郎らが
 年金五〇円をそれぞ
 れ出している。河口
 淳、門田三郎兵衛の
 兩名は発起人総代兼
 庶務取締役であった。
 桐原捨三が所長とな
 り、木村復次、安部
 昇らが教員であった。
 十四年八月桐原捨三
 が所長を辞し、木村
 復次が仮所長となり、
 ついで十一月に山本
 達雄が二十六歳で所

長心得となった(伊勢戸佐一郎「長堀浜日記」二『大阪春秋』第二五号)。
 その後も門田は寄付をつづけ、九百円に達したという。

開業式には建野郷三知事ら府首脳と五代友厚、加藤政之助ら関係者
 が列席し、彼らは席上、大阪府移管後も講習所が「決して高尚に涉ら
 ず専ら実際の事に着目して教授する」ことを確認し、桑原勸業課長は
 「實際を主とするの目的たる明証をあげれば、本校の教場に椅子卓子
 を置ずして、悉皆平等の畳を用ひ、教師生徒とも前垂れがけにて一般
 商家同様の体裁」にすると述べたと伝えている(『朝日新聞』明治十五年
 一月二十七日)。

そして新たに所長には十五年十月住友の伊庭貞剛がなり、山本達雄
 が教頭となって、「大阪商業講習所正速両科改正規則」が定められる。
 正科・予備科各三年、夜間速成科一年半の各科はいずれもかなりの
 生徒を集めたらしい。

本科の下の予備科は学力不足のものに本科通学に備えるものであつ
 た。本科の入学資格は満十三歳以上で小学中等科以上のものとし、一
 カ年を二期に分け、学生等級を付して進学させた。一年生の一期目は
 六級で以後半期の合格毎に級を進めて、三年生の最後の二期目に一級
 に達した。従って卒業については三年間全科(二級卒業生と、途中で
 卒業する(二級・三級)の各種の卒業者があつた(『大阪市立大学の百年』一
 三九頁)。

本科の教科は簿記・算術・語学(英・支・経済・和漢文学・地理物産
 ・商律・実地演習などであつた。
 最後の三年一級教科には簿記学原理・統計大意・算術には累乘法・

対数表用法・商業実地応用・英支語には会話作文・訳・経済には銀行論、商律には商律大意、商律関係諸条例の科目があり、夜間速成科は一年半で、三級制、簿記・算術・実地演習の三科を開講していた(『大阪市立大学の百年』)。

ところがやがて経営困難となり十五年一月、商業講習所は府の勸業課の所屬に移り、十四年八月木村に代わっていた山本所長心得以下の職員は全部辞職し、伊庭貞剛が所長になっている。しかし十五年八月には伊庭は辞して大阪府御用掛天野皎が所長を兼務している。

十五年正月から三月の三カ月間に新規入学生は正科十五名、速成科三十五名、一月以前に退学して再入学したもの正科五名、速成科一名に達した。また明治十七年六月には正科七十八名、速成科七十七名を数えている(『大阪府勸業月報』一六号、『大阪府教育百年史』第三卷、史料編二、九六九頁)。

府に移管されたものの、講習所の経営費捻出には苦慮し、十六年に経費を大阪区部会にもとめたが、否決され明治十七年十一月、府は農商務省に補助金の下付を申請した。その際、十七年一月公布された「商業学校通則」によって教則を整備するように指示され、その結果、府立商業講習所は通則第一種に準拠して、修業年限三年、十三歳以上、小学校中等科卒業の学力を有することを入学資格とする大阪府立商業学校として、明治十八年三月に開校した。勸業課の下にあって同校の経費は地方税をもって支弁されることになる。そして十九年二月、付属速成科を廃して、四月付属夜学英语科を設置したが、これもまた翌年十二月廃止される。その後同校は府の学務課に移され、二十一年五

月予科及び本科において別に付属科をおく。二十一年の施設の拡張にあたり、伊庭貞剛はその校長を嘱託され、二十二年十月大阪市に移管されたときまで、伊庭は校長をつづけた。広瀬・伊庭はともに大阪商業学校に大いに寄与したわけで、伊庭は府立商業学校時代の講堂に「正々堂々」の四文字を揮毫していた。大阪高商、大阪商大はもとより、いまの大阪市立大学も、そのもとをたどれば大阪商業講習所にいきつくわけで、それらには、五代のみならず、住友の広瀬・伊庭も寄与したということになる。

しかし生徒の出席率は悪く、在籍者の半数が出席したにすぎず、生徒の大半は入学後六カ月第六級の課程を終わったにとどまり、三カ年の全課程を終わったものは十五年から十九年の五カ年間で僅か一名にすぎなかった。また大阪出身のものが多かったので、「芝居があれば休む」という有様で、怠学ぶりが目立っていた。府民が実業教育に認識をもたず、また当時の社会情勢が悪く、松方緊縮財政下で商況が沈滞し、十八年六月の淀川大洪水で小・中学以上の就学は困難となったからであろう(『大阪商科大学六十年史』九七頁、『大阪百年史』一〇二二頁。竹下喜久男「明治前期大阪における商業教育の展開」、『日本史論集』。宮本文次『大阪文化史論』三五四～五五頁)。

二十二年七月文部省告示第九号をもって、また同年法律第一号徴兵令第十一條により、本校は中学校の学科程度と同等以上のものと認められる。

二十三年九月、本校は大阪市に引き継がれ、市立大阪商業学校と改称する。

一代の人格者、教養人たる伊庭貞剛が校長というからには立派な学校に仕上げられたであろう。

市立大阪商業学校では、予科・本科各二年、高等科一年、別科各二年で、付属語学部では支那語・朝鮮語を課していた。この間の事情については記述を割愛する。

のち明治三十四年に昇格して市立大阪高等商業学校となるが、この間幾多の人材を教育した。野村徳七も岩本榮之助も木谷蓬吟もこの府立又は市立大阪商業学校時代の生徒であった。

なお創立時に大いに寄与した門田三郎兵衛は明治二十年には家運が立たむきはじめている。

明治十七年二月、門田は大阪鉄工所を経営していたエドワード・ハズレット・ハンターから同鉄工所を洋銀八万九千円でゆづりうけるが、わずか一年でその割賦金を払えず、またハンターに経営権が移っている。

先に西南戦後、英人ハンターは造船所を計画し、門田三郎兵衛と佐畑信之の賛成を得て、明治十二年二月に大阪鉄工所をつくった。佐畑も神戸の材木問屋でギルビー商会で働いていた秋月清十郎の友人であった。ハンターの造船所は、西成郡春日出の門田三郎兵衛の所有地、六軒新田の松ヶ鼻の地を選定した。こんな縁で十七年二月に土地・建物・機械・乾ドックその他の設備を洋銀八万九千円で門田がかいいた。しかし海運界の不況もあってその上他の事業にも失敗して、ハンターへの割り払い金をチャンと納めることが出来ず、門田の契約不履行から、一年あまりで再びハンターの手にかえったのである。明治三

十五年十一月八日四十八歳をもって門田は失意のうちに、堀江の地で他界する。門田の生家熊野屋理平店(熊平)の当主も明治二十年頃に不敬罪の疑をかけられて、国外に出てしまう。かくて、熊野屋は五代目であえてしまうことになる(宮本又次「大阪商人太平記」(上)『宮本又次著作集』第九卷三六〇―三六四頁、伊勢戸佐一郎「長堀浜日記」『大阪春秋』第二五号)。

(みやもと またし 大阪大学名誉教授)